

Q-4 探究的な学びをした生徒をどのように評価すればよいの？

これまで BS 版では、本校 SSH 事業の目的や BUN-petency、学びのアクション、学びのレンズなどについて紹介してきました。授業の中で探究的な学びを取り入れていくうえで、多くの先生方が気になるのが「評価」の問題ではないでしょうか。

ここでは、評価についての基本的な考え方を整理してみます。

① Assessment と Evaluation

英語では「評価」を表す言葉として、主に次の2つが使われます。

Assessment : 日々の授業の中で行われる、学びの様子を見取ること（必ずしも数値化する必要はない！）

Evaluation : Assessment を踏まえて、成績や評定としてまとめて示すこと

評価というと「テスト」や「評定」を思い浮かべがちですが、実際には授業の中での見取りが重要な役割を担っています。このように考えると、評価とは必ずしもテストや評定だけを指すものではありません。授業の中で行われる「学びの見取り」が評価の中心になります。

② 探究的な学びの評価は「プロセス」

では、探究的な学びでは何を見取ればよいのでしょうか。探究的な学びでは、最終的な成果だけでなく、学びの過程（プロセス）が重要になります。これは BS No.3 で紹介した「学びのアクション」そのものでもあります。

つまり、探究的な学びの評価とは、新しい評価方法を作ることではありません。授業の中で行われている学びのアクションを見取ることだと言えるでしょう。

③ 評価は「増やす」必要はない

こうした評価について考えるとき、多くの先生方が感じるのが「評価の負担が増えるのではないか」という不安です。しかし、評価は必ずしも新しく増やす必要はありません。たとえば、日々の授業の中で次のような場面があります。

- ◆ ノートや授業プリントを見る
- ◆ 発表や発言、感想を聞く
- ◆ ペアやグループでの話し合い
- ◆ ミニレポートや振り返り

これらはすべて、学びの様子を見取る **Assessment** の機会です。すでに授業の中で行っていることを、どのような学びとして見取るのかを意識することが大切です。こうした考え方は、現在議論されている次期学習指導要領の方向とも重なっています。

④ これからの教育の方向

現在、次期学習指導要領に向けた議論の中では、

学びの過程

中核的な概念

深い理解

といった観点がより重視される方向にあります。BS 版で紹介してきた

学びのアクション

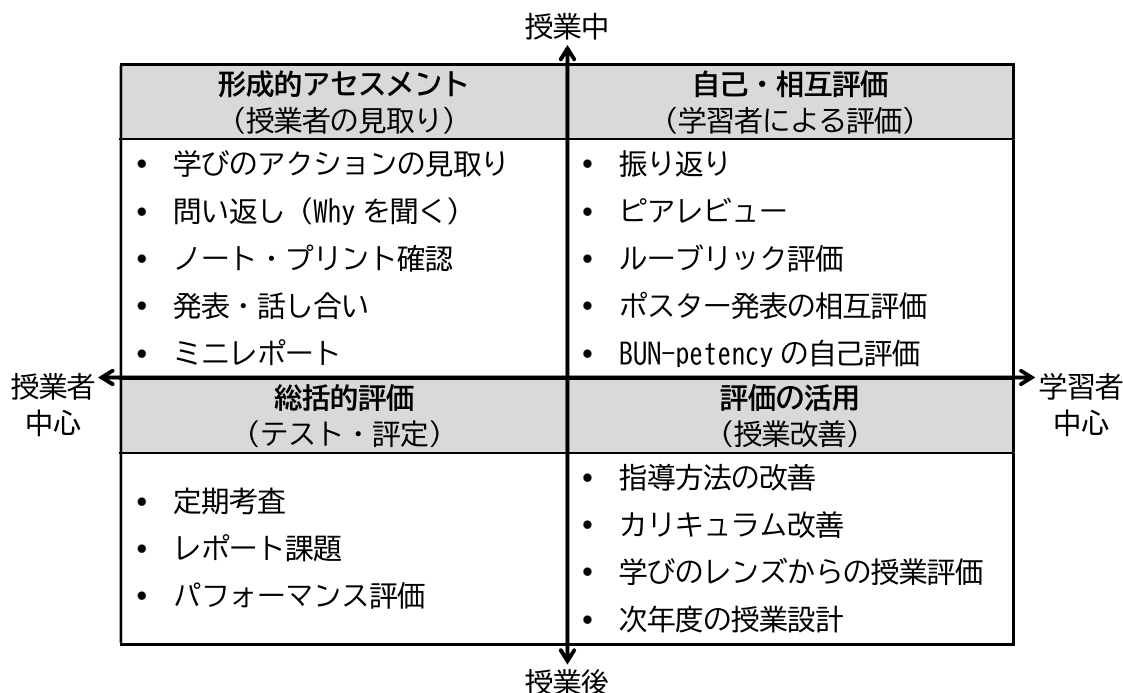
学びのレンズ

BUN-petency

といった考え方も、こうした動きとつながるものです。

評価についても、「何点取れたか」だけではなく、どのように学んだかを見取る視点が重要になっていくでしょう。

学びのための評価(Assessment for Learning)



思考・判断・表現は「記述」だけではない？

Column

思考・判断・表現の評価というと、「記述させる」とか「説明させる」というイメージを持つことも多いかもしれませんが。それゆえ、難しい問題や複雑な問題を出すこともあると思います。しかし、教育評価の研究では、必ずしもそうとは限らないことが指摘されています。

たとえば Scully (2017) は、高次の思考 (higher-order thinking) を評価する際に、「記述式問題でなければ測れない」という考えは必ずしも正しくないとしています。適切に設計された選択式問題でも、知識の適用や分析といった思考過程を問うことは可能だとされています。

実際、問題の作り方を工夫することで、

- ◆ ある概念を具体的な場面に適用させる
- ◆ 複数の情報を組み合わせて判断させる
- ◆ 最も適切な説明を選ばせる

といった思考を引き出すことができます。

もちろん、すべての思考を選択式で評価できるわけではありません。しかし、「思考・判断・表現＝記述問題」と単純に結び付けるのではなく、どのような思考を引き出す問題になっているかという視点で評価を考えることが重要です。

